

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：42681

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350060

研究課題名(和文)感情労働としての子育てに関する研究

研究課題名(英文)The study of child-raising as emotional labor

研究代表者

平野 順子(HIRANO, Junko)

東京家政大学短期大学部・短期大学部・准教授

研究者番号：20387327

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：文献調査と子育て広場に集う母親達への参与観察により、乳幼児を育てる家庭の育児の現状の整理を行った。そして、感情労働研究の整理を行った。母親たちの置かれている育児状況について確認をし、育児分野における感情労働研究の動向を整理したところ、家庭内労働としての育児は感情労働と言えるが、研究レベルでは少ないことが分かり、育児の感情労働的側面に着目して母親支援を行う必要性が示唆される。

研究成果の概要(英文)：We organized the present condition of child rearing for families raising infants by investigation of literature and observation of participation in mothers gathering at child-rearing plaza. It was found to be few research about emotional labor research in the field of child rearing.

研究分野：家族関係学

キーワード：感情労働

1. 研究開始当初の背景

(1) 関連研究の動向

核家族化による家族の子育て機能の低下、それによって起こる少子化や育児不安、虐待や家庭の孤立など、昨今、子育てを巡る社会的問題は枚挙に暇がない。また、乳幼児を抱える夫婦では、未だ性別役割分業が行われており、母親が主に育児を担当し、核家族化によってそれが孤立して行われていることが問題視されてきた。

家庭における子育てに関する研究動向を見てみると、ほとんどが母親による子育てについての研究であり、とくに、子育て中の母親に関する病理については、牧野(1984)に端を発した育児不安研究の分野で蓄積がなされてきた。しかし、岩田(1997)他により、育児不安研究には限界があると論じられ、しかしその後も、育児不安や育児ストレスといったキーワードを通して、母親たちの育児の困難性について研究が行われてきた。

(2) 着想に至った経緯

家族社会学の観点から、育児中の親、とくに母親の抱える育児困難の要因や解決法などについて考え、学会発表や地域の子育て情報誌への寄稿などを行ってきた。育児不安の要因が解明され、それを解決するためには父親の育児参加や、母親がネットワークを持つことの必要性が明らかになった。しかし、父親の育児参加は諸外国と比較して少なく、また核家族化や地域交流の希薄化により母親の持つネットワークにも限界がある。そのため、親が行う育児の困難性を捉えるためには、育児不安という切り口での研究とは異なる視点での研究が必要であると強く感じている。

そう感じるようになったのは、応募者自身が2009年に出産し、産休・育休を経て現在の職にあるという経験も大いに影響している。産休・育休中は地域の育児中の両親たちとの交流を深め、また現在でも母親の交流の場へは積極的に参加し、参与観察という形で母親たちに様々な話を聞いてきた。多くの母親たちは、育児を楽しみにしながら出産し、出産を機に育児に専念していた。しかし、「育児に専念しているのだからいい母親にならなければならない」、「子を持つ母親は母親として生きることが第一義」、「笑顔の母親・妻

がいい女性」、「子どもを怒らずに見守るべき」などの戦後の母性神話を中心とした言説に支配され、感情のコントロールを強く求められ、苦しめられることも多々ある。これは、先行研究において言われてきた、家族が感情労働の基盤となっていることの表れである。子育て家庭の両親が、なぜ苦しんでいるのか、どうしたら育児を楽しめるのか、この数年間考えてきた。

(3) 感情労働について

感情労働とは、「相手の中に適切な精神状態を作り出すために、自分の感情を促進させたり、抑制しながら、自分の外見を維持することを要求する労働」のことで、1983年にA.R.ホックシールドが提唱した。看護職・介護職などのヒューマンケアサービスやCAなどのサービス業などの職業においてとくに見られる労働であるとされ、これらの分野での研究蓄積がなされてきた。感情労働は、職業としてのみならず、家族内のケア行為にもその特徴があてはまるとされている。感情労働の起源は家庭にあり、それは女性の本来性とも言われる。しかし、家族内の感情労働についてはまだ研究が始まったばかりで、長津ら(2011)や田中(2010)の老親ケアにおける感情労働についての研究以外、研究はほとんど見られていない。

先行研究でも言われている通り、家族内ケアにおいても感情労働が成立しており、育児も例外ではない。子どもの行動に対しては、社会的に適切とされる親の対応があり、自分の感情や精神状態を押し曲げてでも、適切な対応が要求されることが多々ある。前節のように、巷には昨今「いいお母さん」「叱らないお母さん」「お母さんが子どもの将来を左右する」という言説が多く、母親たちは感情をコントロールするよう社会から要請され、遂行することにより、育児にストレスを感じている。しかし子育てを感情労働として捉えて研究したものは、あまり見られていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、両親が行う子育てを「感情労働」として捉え、子育てにおける感情コントロールの現状を明らかにすること、である。

研究当初はそれ以外にも研究目的を挙げ

ていたが、その後の事情の変化（期間中の妊娠・出産・子の病気等）により、目的は果たせなくなってしまった。

3. 研究の方法

文献調査、育児支援の現場に集う母親たちの集まりで参与観察することによって検討する。

4. 研究成果

(1) 文献調査から見た感情労働

感情労働 (emotional labor) とは、米国の社会学者ホックシールド (1983) が提唱した労働概念であり、「相手の中に適切な精神状態を作り出すために、自分の感情を促進させたり、抑制しながら、自分の外見 (表情や身体的表現) を維持する」ことを要求する労働だと定義されている。具体的には、客室乗務員や集金人の他、看護師や保育士も感情労働が求められる職業として考えられている。個人が抱いた感情と感情規則 (葬式では悲しむといったような、その場でふさわしい感情を持つことが求められること) が異なる場合には、感情管理が行われる。つまり、感情労働とは、感情規則に従って、自分の感情を管理することが要求されるのである。

感情管理の方法には、自分の感情を隠したり、違う感情を持っているふりをする表層演技と、表面的な外見ではなく意識的に望ましい感情を呼び起こそうとする深層演技の2つがある。これらにより、大きな精神的ストレスを感じることもある。

(2) 子育ての感情労働的側面

子育てとは、子どもを愛情深く見守り、社会化を行う過程である。一旦子どもが産まれると、生活は一変して子ども中心となる。その中の母親たちが持つ負担や悩みはいろいろあるが、自分自身のために使える時間が奪われてしまうこと、子どもは大人の思い通りにはならないことなどが多い。しかし、家庭内でそれを共感しあえる相手はおらず、社会に見られる望ましい母親像のプレッシャーもあり、育児中は感情管理を行うことも多い

と考えられる。

また、最近子どもとの接し方が分からず、子どもと経験や気持ちを共有できない親も存在するという指摘も保育者達からなされることがある。子どもと気持ちを共有できないことすら親たちの感情労働の負担となっていると考えることも可能なのではないか。

感情労働とは文字通り「労働」であり、対価として賃金を得る職業労働と子育てを同類の労働として考えることに抵抗があるかもしれない。しかし、家庭内で行われる主婦の仕事や介護・育児も無償労働として「労働」に類され、対価を得ないだけで職業労働と同じく責任を負う労働であると考え、子育てに労働という言葉当てはめることができる。

(3) 父親の感情労働

家庭内における感情労働は、主に育児や家族を精神的に支えるという仕事があてはまる。しかしながら、実際に父親の育児参加は母親と比して少なく、そのため子育て以外の影響力が高く、子育てによる影響力は低い (菅野ら、2003)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

なし

〔学会発表〕(計 0 件)

なし

〔図書〕(計 0 件)

なし

〔その他〕
ホームページ等

なし

6 . 研究組織

(1)研究代表者

平野 順子 (HIRANO, Junko)

東京家政大学短期大学部・保育科・准教
授

研究者番号：20387327